英文学の確立 / 変容とオスカー・ワイルド
——詩人、批評家、小説家、学者たちの世紀末

原田 範行

1. ワイルドと文学教育

ワイルドは、1894年に「教育過剰な人々ための金言」と題する小品を著している。教育をめぐる評言や論考が、彼の著作の中でそれほど多くはないことを考えれば、小品とはいえ、注目すべき点が少なくない。その冒頭で、彼は次のように述べている。

> 教育とはたしかにすばらしいものだが、知る価値のないことが教えられていると思うこともしばしばある。
> そもそも世論とは、優れた考えのないところにのみ存在する。
> イギリス人は常に真理を事実に貶めようとしている。真理が事実となるとき、その知的価値はすべて失われてしまう。
> (中略)
> かつて、書物は文人によって書かれ、一般の人々がそれを読んだ。今日、書物は一般の人々によって書かれ、誰もそれを読みはしない。(570)[1]

時に同時代のジャーナリズムと戯れるような関係を示しつつも、ワイルドは、その大衆性・俗物性を厳しく指弾し、芸術家の卓越した創造行為を常に重視した[2]。その創造行為とは、例えば心情の吐露というような、創造のための意匠を欠くようなものであってはならない、というのが彼の考えであった。『芸術家としての批評家』の中で彼は言う。「あらゆる優れた想像的作品は、自意識によるものであり、また考え抜かれたものでなければならない。いかなる詩人も、歌わなければならないから歌うのではない。少なくとも偉大な詩人はそうだ。偉大な詩人は、歌うことを選びとるからこそ歌うのだ」(1020)[3]。情に任せて歌う、という

ような行為は創造ではない、想像が優れた創造に結実するために、詩人は、その形式を厳しく選択し、内容を彫琢する必要がある――それがワイルドの芸術観であった。そしてこの考え方は、彼の批評観にも直結するものであった。ワイルドにとって批評は、例えば、芸術作品の分かりやすい解説をして、読者としての「一般の人々」と作品とを結ぶような類のものではない。批評そのものも一つの創造行為として、否、批評精神こそ創造の基本として、自立したものでなければならない、そうワイルドは言う。『芸術家としての批評家』において彼は、先の引用に続けて、次のように述べている。「優れた芸術に自意識のないものはない。そしてこの自意識と批評精神とは一体のものである」(1020)。このような芸術観・批評観からすれば、芸術作品の分かりやすい解説がしばしばみられる「教育」的場面において、「知る価値のないことが教えられている」という観察は、ごく自然に生み出されたものと言えるだろう。「教育」は、芸術家の創造行為に近づくための貴重な機会を提供する可能性を有しつつも、実際には、安易な解説が横行しているという見方は、「優れた考え」を少しも持たない「世論」、そして、文人ではなく「一般の人々によって書かれ」た書物の氾濫、という形で、世紀末の出版文化への痛烈な批判ともつながっているからだ。教育をめぐるワイルド自身の言説があまり多くないのは、結局のところ、教育が、「一般の人々」を念頭におく大衆性を必然的に伴うものであり、それゆえ、彼の関心領域の周縁に留まらざるをえなかったということ、他方で、大衆性・俗物性に関しては、ジャーナリズムを含む当時の出版文化にこそ、その特徴が際立っていたため、彼の批判的言説はむしろそちらに向かったということとが、理由として考えられよう。

教育問題へのワイルドの関心の希薄さは、しかしながら、英文学の確立と変容をめぐる世紀末から20世紀初頭の動向を考えるとき、ある重要な意味を帯びてくる。というのも、オクスフォードやケンブリッジをはじめ、イギリスの高等教育機関において英文学を教育するという制度がはっきりとした形を取ってくるのはまさにこの時期であり、それとともに、「一般の人々」を読者とする文学の入門書や解説書が続々と出版され始めていたからである。卓越した芸術家の創造行為をめぐるワイルドの主張と、「文学とは何か」、「文学を学ぶ、あるいは教育する意義はどこにあるのか」といった議論とは、当時、実はまさに同時並行的に展開していたのである。彼の母校オクスフォードに、現在の英文学部の基礎となる「オクスフォード・イングリッシュ・スクール」が創設されたのは、ワイルドが先の「教育過剰な人々のための金言」を執筆していたのと同じ1894年のこと、『英詩の歴史』(1895)をはじめ、今日に至る研究・教育の礎を築いた英文学者の一人、

ウィリアム・ジョン・コータップが詩学教授としてオクスフォードに着任したのは、その翌年である。

本稿では、こうした事情を勘案し、まず19世紀末に至る文学概念の変遷を整理することで、一般的な文学観と、ワイルドの芸術観・文学観が乖離していたことを明らかにする。次に、この乖離が、小説家や詩人とも密接な関係を有していた当時の主だった文学研究者の間でどのように認識されていたのかを、先に触れたコータップやアーサー・クィラクーチ等とワイルドとの関係から検証する。そしてこの考察を通じて、ワイルド文学の特質を、英文学の確立と変容という視点から改めて明らかにすることを試みたい。『社会主義下の人間の魂』の中でワイルドは、ジャーナリズムを含む当時の出版文化を、かつての「拷問台」にも劣らず、「ひどいもので、間違っている」とした(1094)[4]。大衆性と向き合うそうしたワイルドの姿勢は、今日に至る文学教育のあり方にも、ある重要な示唆を与えてくれるものに違いない。

2. イギリスにおける文学概念の変遷と文学教育――18世紀から19世紀を中心に

イギリスにおける詩や演劇、小説、あるいは旅行記などの表現領域を包摂し、いわゆる自由七科の文法や論理、修辞などとは異なる、英文学という概念がその相貌をはっきりと示し始めたのは、概ね18世紀後半のことである[5]。サミュエル・ジョンソンは、その『英語辞典』(1755)において、"literature"を単に、「学問、文人の諸技術」とのみ定義していたが、そのジョンソンの晩年の作品においては、"literature"の語義が、「文学的仕事もしくは作品、文人の活動もしくは専門的な仕事」というように幾分狭まってきていることをいちはやく指摘したのは、*OED*("literature"の語義2)である[6]。*OED*によれば、その語義は19世紀に入ってさらに限定的なものと考えられるようになったことが分かる。「文学的著作物全般。ある特定の国や時代にあって生み出された著作物一般、今日ではさらに限定された意味で用いられ、様式美や感情的効果などに基づいた考察を必要とする著作物に適用されるもので、この意味は、英語でもフランス語でもごく最近登場してきた」("literature"の語義3)――そう定義を記す*OED*が、この語義のために引用している例文の初出は、1812年、最も新しい用例はジョン・リチャード・グリーンの『英国民小史』(1874)からのものである。他方、*OED*にはまた、"literature"の語源であるラテン語の"litteratura"(書き物一般)にむしろ近いと思われる"literature"の現代的な語義、すなわち「あらゆる種類の印刷物」も語義3-c

に記載されていて、その用例には1895年の『デイリー・ニューズ』紙に見られる、「広告や貼り紙、そして、言葉の世俗的悪用によって“literature”と呼ばれる配布物など」という一節が引用されている。

ある語の意味が有する包含範囲の説明として、もちろん、辞書的定義には限界がある。だが、少なくとも*OED*が引用している用例は、*OED*の語義区分の妥当性をある程度保証するものと言ってよいであろう。フランシス・ベイコンの『学問の前進』(1605)に見られる“There hath not beene . . . any King . . . so learned in all literature and erudition, diuine and humane”が、ジョンソンの『英語辞典』の語義や、それを引き継いだ*OED*の語義1に相当するものであること、そのジョンソンが晩年に著した『イギリス詩人伝』の最初の巻(Abraham Cowley)の冒頭に記した“An author whose pregnancy of imagination and elegance of language have deservedly set him high in the ranks of literature”が、明らかにベイコンの“literature”の内容とは異なるものであって、語義1と語義3の中間的なものであること、あるいはまた、先に触れたグリーンの『英国民小史』の一節である“The full glory of new literature broke on England with Edmund Spenser”が今日的な意味での「文学」にほぼ相当するものであること、などは明らかであり、*OED*が挙げていない多くの用例をこれらに加えることも容易だからである。

少し整理しておこう。元来、書き物自体が貴重であった時代に「書かれたもの」として使われていたラテン語の“litteratura”は、英語の“literature”となって、中世以降、ルネサンスから近代初期にかけては広く学問や文芸全般を意味する言葉として使われ、それが、ジョンソンの『英語辞典』にまで残存することとなった。他方、この“literature”は、18世紀後半以降、今日的な意味での「文学」、あるいはフランス語からの借入語である“belles lettres”(純文学)に近いものとして次第に意味範囲を狭め、国や地域、時代の特性に加え、文学的価値基準といったものが加わって限定的に使われるようになっていく。*OED*の語義2および語義3は、その経緯を明示したものである、ということになる。

ところで、こうした変遷は、基本的に何によって促され、結果としてどんな変化をもたらすことになったのか。むろんこの問題を考えるには、散文フィクションとしての小説という表現領域の台頭をはじめ、多くの事象を総合的に考える必要があり、本稿の対象を大きく越えるものとならざるをえないのだが、ここでは、ワイルドと19世紀末における英文学概念とを考える上で重要と思われる点を一つだけ指摘しておきたい。それは、ちょうどジョンソンの“literature”への言及が、「文人の諸技術」や作者の「豊かな想像力と言葉の美しさ」といった、いわば文学の発信者の側の資質や技量への関心を強く反映したものであったのに対して、19世紀以降は、“literature”が社会的に認知されたものであるという要素が強くなる、ということである。*OED*が指摘しているジョンソンの『イギリス詩人伝』からの引用は、作者の創造行為が優れた特殊性を有していることに言及しつつ、それが社会的に認知されたものであることを述べていて、ちょうど両者の中間的な意味合いを帯びたものとなっているが、例えば先に触れたグリーンの『英国民小史』の一節は、スペンサーの業績が社会的に認知されたものであるという点に比重が置かれ、スペンサー自身の個人的で内的な営為としての創造行為への関心は希薄である。社会的な認知、すなわち「一般の人々」がどれだけ創造者の作品を受容し、評価しているのか、という点が文学概念そのものに深く関与するようになってきた——そういう特質を文学概念の変遷に見出すことができるのではあるまいか。

創造者の論理ではなく、受容者の論理に比重が移行するとき、文学は、「何をどう読むべきか」という教育を必要とするようになる。実際、イギリスにおいて最も早く創設されたと言われる英文学的講座は、1762年に始まったエディンバラ大学における「修辞学および純文学に関するジョージ3世欽定講座」であって、それはまさに、あのジョンソンが、彼自身の中で文学概念の変化を感じつつあった時期にほかならない。ちなみにこのエディンバラ大学の欽定講座の初代教授は詩人にして聖職者であり、ジョンソンとも親交のあったヒュー・ブレアである。彼は当初、自らの関心から修辞学や文学的創作法を無報酬で教えるに過ぎなかったが、学生の人気が高く、それによって大学側が彼の講義を欽定講座に格上げしたという事情がある。文学教育を求める声の高まりは、この頃にまで遡ることができると言えよう。そしてこうした文学教育の需要は、出版文化の発展とともに拡大した読者層を背景に19世紀を通じてさらに高まり、世紀末から20世紀初頭にかけて、ついにはオクスブリッジにも同様の講座が誕生するに至ったのである。

しかしながらここで注目しておきたいのは、そうした需要の高まりに応じて、大学の講座とともに続々と出版された文学入門書や解説書の論述の多くに、実は、ある種の困難が常に表明されていた、ということである。「文学とは何か」、「文学を学ぶ意義はどのようなものか」という問いに対する解答を説明しようとする、そうした入門書や解説書、あるいは英文学者にとって、それでは何が困難であったのか。

3. 発信者と受信者を結ぶ絆の欠如——世紀末の英文学事情

一例を見てみよう。ウィリアム・ヘンリー・ハドソンが、1910年に出版した『文学研究入門』は、著者ハドソンがそれまで各地のポリテクニック（総合専門学校、現在は主に大学となっている）で多くの学生や一般の聴衆を相手に講じた文学入門の講義をまとめたもので、当時多くの版を重ねていた典型的な文学入門書の一つである[7]。彼はその冒頭で、「文学という語がどんなに曖昧に使われようとも、文学的な意義のある書物とそうでない書物との間にははっきりとした区分があって、鉄道案内や料理書と、『失楽園』や『衣装哲学』といった文学書では明らかに違う」と明確に述べている（9）。その限りにおいて、この『文学研究入門』の論述はきわめて明快である。ところが、「その両者の境目がどこにあるか」、ということになると「不確かである」とし、文学の拠り所は結局、読者の「審美的満足感」（aesthetic satisfaction）であると述べることになる（9-10）。そうした満足感を与える四つの要素としてハドソンは、「私たちの自己表現欲求」、「人間とその行動への私たちの関心」、「現実社会あるいは想像力によって生み出された世界への私たちの関心」、「フォルムの美しさへの私たちの愛好」だ（11-12）。

文学的ではないと考えられる書物の例を引きながら、対照的に文学の特質を明快に述べようとしたハドソンが、しかし、両者の境目を説明しようとしたその刹那、困難に陥り、読者の満足感を四種類に分類して示すことで、文学の特質を間接的な形で辛うじて提示するに至った——そういう経緯を、この『文学研究入門』ははっきりと示している。ハドソンは言う。

> 文学作品が、天文学や政治経済、哲学、あるいは歴史など特定の分野の書物と異なるのは、ある特定の階級や読者のみを対象としたものではなく、まさに一般の男女そのものを対象としているからであり、たんに知識を伝達するのではなく（中略）作品が扱っているテーマの示し方を通じて読者の審美的満足感に訴えるものだからである。（10）

逆に言えば、「天文学や政治経済、哲学、あるいは歴史など特定の分野の書物」が、確たる知識を、それを求める特定の読者に伝達することを念頭に置いているのに対して、文学作品の場合、その確たる知識自体が判然とせず、それが有意義であるのかないのかは、読者の「審美的満足感」に委ねざるをえない、というわけである。教育的意義を考えるべく出発した文学の意義に関する考察が、創造者の論理に代わっていつの間にか受容者の論理に依拠するものとなっていることは

明らかであろう。文学教育における議論は、文学作品が伝えるべき確たる知識、すなわち発信者と受信者の共通理解に資する絆を欠いて、作者の創作工房から乖離し、読者の審美的満足度の高低にすり替えられてしまっているのである。四つの読者の審美的満足感を述べるハドソンが、そのいずれについても「私たちの」と記していることは、文学作品を捉える際の主体の交代を象徴的に示すものと言えよう。

創作者として、あくまでもその創造行為の自立性を標榜するワイルドの立場は、当然のことながら、こうした英文学教育に見られる文学作品の受容論とは著しく異なるものであった。だから彼は、「教育」とは「知る価値のないことが教えられていると思うこともしばしばある」と言ってはばからないのである。この意味において、ワイルドの言説が、当時の英文学の教育者によって批判的に捉えられていたであろうと予想することは、必ずしも的外れではあるまい。だが、面白いことに、当時のオクスフォードやケンブリッジにおける英文学講座を担った教授たちは、創作者の創造行為の自立性を強く主張するワイルドに対して、実は必ずしも否定的であったわけではなかった。例を見てみよう。

先に触れたように、1895年にオクスフォードの詩学講座教授に就任したコータップは、オクスフォードのニュー・コレッジ出身で、1864年にはオクスフォードの学生の優れた詩作に与えられるニューディゲイト賞を受賞している。ワイルドが同賞を受賞する14年前のことだ。詩学講座の教授に着任した彼が著した『英詩の歴史』が、その後の英詩研究に大きな影響を与えたことは言うまでもない。このコータップが、ジョン・キーツをはじめとするロマン派や、アルジャノン・スウィンバーン、ダンテ・ゲイブリエル・ロゼッティ、ウィリアム・モリス、といったラファエロ前派、さらにはウォルター・ペイターの審美主義といった系譜の継承者であるとの立場を鮮明にしていたワイルドの作品に批判的であったことはよく知られている。その想像力は、「官能的快楽」の発露に過ぎないというのが、コータップの見解であった[8]。古典派に近く、保守派の論客としても知られるコータップにとって、キーツ的想像力は反社会的自由主義の表れであり、その有害な精神に、ワイルドを含む当時の多くの詩人が毒されている、というのである。この意味においてコータップとワイルドは、決して相容れることのない関係にあったと言えよう。詩作のあり方を政治的社会的理念にかかわる問題として論じている点でも、創作者の想像力を重視するワイルドとは明らかに異なっている。しかしながらここで注目しておくべきことは、それではコータップの議論が、例えばハドソンのような文学の受容論に変質してしまっているかと言えば、決して

そうではないということだ。詩とは何かを論じるにあたって彼は、詩人の創造行為の原点にあるものが、他の芸術ジャンルの創造とも重なり合うものであることを主張する。「絵画の詩、ないしは建築の詩というべきものがあると申し上げても差し支えあるまい」――コータップは、そうオクスフォードの講義で述べている(9)[9]。彼の焦点が、まさに詩人の創作工房に向けられていたことは明らかであろう。そしてこの意味において、当時の詩人に見られる「官能的快楽」批判にもかかわらず、コータップは、ワイルドと同様、確たる創作者重視の姿勢を有していたと考えられるのである。

1912年以降、30年以上にわたってケンブリッジ大学の「エドワード7世欽定英文学講座」の教授職にあって、ケンブリッジの英文科の基礎を築いたアーサー・クィラクーチもまた、明らかに、文学作品の読者ではなく創作者に焦点を当てた論述を多く残している。その代表的著作の一つである『文章執筆の技』(1916)は、ケンブリッジ大学で実際に講じられたもので、ハドソンの『文学研究入門』と同様、文学作品を読むことの意義についても多くの言及が見られるが、その論旨は、ハドソンとはまったく対照的である。すなわち、読者は、芸術的作品を前にしてこれに「絶対的に服さなければならない」(11)、その経験から読者は美的精神と言うべきものを感得するのであって、優れた文学作品の価値は「知識の記憶」(13)にはない、と言うのである[10]。ワイルドの「教育過剰な人々のための金言」を意識したとされるこの『文章執筆の技』が、文学作品の読者を念頭に置きつつも、作品を執筆する創作者の論理を重視し、読者に絶対的服従を求める点で、そして一般的な意味での知識の伝達を文学作品の主たる目的とはしていないという点で、ハドソンの『文学研究入門』のような教育書とは性格を異にするものであることは明らかであろう。ワイルドは既にこの世になく、20世紀初頭の大衆的読者を念頭に置く文学の入門書や教育書が多く出版されている中にあって、しかしクィラクーチの立場は驚くほどワイルドに近い。彼が1922年に編纂した『オクスフォード版ヴィクトリア朝詩集』にワイルドの「レクイエスカット」が収められているのも、彼のワイルドへの親近感の表れと言えよう。

このほか、1895年から1915年にかけてエディンバラ大学の「修辞学および英文学講座」の教授職にあったジョージ・エドワード・セインツベリー、また、アルフレッド・テニソンやスウィンバーン、トマス・ハーディ、ヘンリー・ジェイムズ等と親交を結び、ケンブリッジのトリニティ・コレッジで英文学の講義をおこなったエドマンド・ゴスなどが、ワイルドの批評的立場から少なからず影響を受けていたことは、既にエイドワール・ロディティが指摘している通りである[11]。19世紀末から20世紀初頭にかけて、オクスフォードやケンブリッジにおける英文学講座を担った教授たちは、ハドソンとは異なり、実は、創作者の創造行為の自立性を強く主張するワイルドの立場にむしろ近かったと言えよう。かりに、クィラクーチのように、文学作品の読者への教育を念頭に置く著作に従事していたとしても、である。

オクスブリッジで英文学教育に携わっていた彼らのワイルド的立場への近さは、おそらく、例えばコータップやクィラクーチのように自らが創作者であったり、あるいはセインツベリーやゴスのように同時代の詩人や作家たちと親交を結んでいたりした、ということにその理由を求められるのではあるまいか。自らも小説を執筆しつつ、文学作品の読者に向けて、しかしハドソンのように受容論にはならず、芸術作品の前での絶対的服従を説いたクィラクーチの経歴は、20世紀初頭にあって、読者との関係を意識しつつも、なお創作者の論理に依拠しようとした英文学の研究者・教育者の微妙な立場を象徴的に示している。

4. ワイルドの批評的立場と英文学

文学教育についてあまり多くを語らなかったワイルドが、そういう、いわば二足の草鞋をはいた英文学者をどのように捉えていたのかは、もちろん定かではない。「教育過剰な人々のための金言」を著したのが1894年であったことを考えれば、あるいは、逮捕・受刑から死に至る彼の人生のその後の急転回が、このような英文学の研究・教育への発言の機会を奪ってしまったとも言えるのかも知れない。

他方、英文学にかかわる20世紀および21世紀の研究・教育の基本的な動向は、一部にクリエイティヴ・ライティングのような創作行為を重視したカリキュラムを生み出しつつも、しかし大勢は、文学現象を対象化して客観的に分析し、文学作品がもたらす読者や社会への効用を明らかにする、という方向に向かっていると言えよう。そういう動きの中で、例えばクィラクーチが主張した「絶対的服従」というような見解は、次第に「一般の人々」への説得力を欠いていくことになる。読者の論理を重視した出版文化を「拷問台」にも劣らず「ひどいもので、間違っている」と述べたワイルドの大衆文化に対する抵抗は、世紀末が生んだ一つの異端として、社会の動向からは乖離したものと考えられることも少なくないであろう。

だが、近現代の文化的動向の中で文学概念が変容し、創作者の創造行為ではなく読者による受容もしくは消費行為に比重を移した文学教育が、今日、困難な状況に直面し、「書物は一般の人々によって書かれ、誰もそれを読みはしない」と

いうワイルドの指摘にある現代的状況の一側面が確かに認められるとすれば、それは、ワイルドが19世紀末にあって、社会の大衆化に対して必死に試みた創作者・芸術家としての抵抗の意義を再考する必要があるということを意味しているのではあるまいか。それは、個人的な特徴や差異を捨象し、表層的な意味での一般性・普遍性を追い求める文学教育や文学研究に対する、個性や独創性の立場からの抵抗である。「誰にでも分かる」という方向性が、結局は没個性的で、「優れた考えのない」ものであることの主張である。あるいは、創作者の創造行為を重視し、その創作工房に立ち入る可能性を、さまざまな点から教育・研究において新たに探る試みとも言えよう。創造行為の自立性を強く主張するワイルドの芸術論は、この意味において、実は英文学の教育と研究の今後を考える指標の一つでもあると言えよう。

＊　本稿は、「1890年代再考」をテーマとする第40回日本ワイルド協会大会シンポジウム（2015年12月5日、於：慶應義塾大学（日吉））での司会・講師としての発言原稿をもとに、これを大幅に書き改めたものである。シンポジウムに登壇された河内恵子先生、川端康雄先生、松本朗先生をはじめ、質疑応答やディスカッションに参加された皆様にこの場を借りて御礼を申し上げる。

注

1　引用は、“A Few Maxims for the Instruction of the Over-Educated,” *Oscar Wilde: The Major Works* より拙訳による。

2　ワイルドとジャーナリズムとの関係については、原田範行「ワイルドとジャーナリズム」なども参照。

3　引用は、Oscar Wilde, “The Critic as Artist,” *The Complete Works of Oscar Wilde* より拙訳による。

4　引用は、Oscar Wilde, “The Soul of Man under Socialism,” *The Complete Works of Oscar Wilde* より拙訳による。

5　18世紀後半から19世紀初頭にかけての英文学概念の変容については、原田範行「英文学史誕生の皮肉――自伝としてのジョンソンの『英国詩人伝』」なども参照。なお、この「英文学」という概念には、「英」すなわちナショナリズムの展開からの影響も大きい。また、19世紀後半に至って、「英文学」を定義しようとする言説が、しばしば海外、特に植民地から発せられた、ということも注目に値しよう。それは、後述するような文学入門書における一般的な困難、すなわち、何が文学作品で、何がそうでないかを区別する基準の設定に困難を感じた文学入門書の著者たちの一部が、一つの分かりやすい方法として、植民地と「本国」とを対比的に記述するという手法を取っていることとも関係する。本稿はワイルドの批評的立場を主眼に置いているので、この問題については、また稿を改めて考察することにしたい。

6　*OED* における “literature” の語義の1、2、3の原文は、それぞれ次の通りである。

1. Acquaintance with ‘letters’ or books; polite or humane learning; literary culture. Now *rare* and *obsolescent*. (The only sense in Johnson and in Todd 1818.)（用例の初出は1375年）
2. Literary work or production; the activity or profession of a man of letters; the realm of letters.（用例の初出は1779年）
3. Literary productions as a whole; the body of writings produced in a particular country or period, or in the world in general. Now also in a more restricted sense, applied to writing which has claim to consideration on the ground of beauty of form or emotional effect. This sense is of very recent emergence both in English and French.（用例の初出は1812年）

なお、ジョンソンの『英語辞典』における “literature” の定義は、“Learning; skill in letters” である。

7　以下の引用は、William Henry Hudson, *An Introduction to the Study of Literature* より拙訳による。

8　Joseph Bristow and Rebecca N. Mitchell, *Oscar Wilde's Chatterton: Literary History, Romanticism, and the Art of Forgery* の特に132頁などを参照。引用は同書より拙訳による。

9　引用は、William John Couthope, *Life in Poetry: Law in Taste: Two Series of Lectures Delivered in Oxford 1895-1900* より拙訳による。

10　引用は、Arthur Quiller-Couch, *On the Art of Writing* より拙訳による。

11　Edouard Roditti, *Oscar Wilde* の特に158頁を参照。

引用文献

Bristow, Joseph, and Rebecca N. Mitchell. *Oscar Wilde's Chatterton: Literary History, Romanticism, and the Art of Forgery*. New Haven: Yale UP, 2015.

Couthope, William John. *Life in Poetry: Law in Taste: Two Series of Lectures Delivered in Oxford 1895-1900*. London: Macmillan, 1901.

Hudson, William Henry. *An Introduction to the Study of Literature*. London: G. Harrap, 1910.

Johnson, Samuel. *A Dictionary of the English Language*. 2 vols. London: printed by W. Strahan for J. and P. Knapton, et al., 1755.

The Oxford English Dictionary (Second Edition). 20 vols. Oxford: Clarendon, 1989.

Quiller-Couch, Arthur. *On the Art of Writing*. New York: G. P. Putman's Sons, 1916.

Roditti, Edouard. *Oscar Wilde*. 1947; New York: New Directions, 1986.

Wilde, Oscar. "A Few Maxims for the Instruction of the Over-Educated." *Oscar Wilde: The Major Works*. Ed. Isobel Murray. Oxford: Oxford UP, 1989. 570-71.

———. "The Critic as Artist." *The Complete Works of Oscar Wilde*. Perennial Library Edition. New York: Harper, 1989. 1008-55.

———. "The Soul of Man under Socialism." *The Complete Works of Oscar Wilde*, Perennial Library Edition. New York: Harper, 1989. 1074-97.

原田範行.「英文学史誕生の皮肉——自伝としてのジョンソンの『英国詩人伝』」『十八世紀イギリス文学研究——交渉する文化と言語』. 日本ジョンソン協会編. 東京：開拓社、2010. 142-58頁.

———.「ワイルドとジャーナリズム」『オスカー・ワイルドの世界』. 富士川義之、玉井暲、河内恵子編. 東京：開文社出版、2013. 401-23頁.